「底が突き抜けた」時代の歩き 549

「存在すること」を奪われている言葉とは別の方向から

《言葉にすることが不可能な「存在」》の前で私たちが立ち止まるのは、《その「存在」について語る方法を、わたしたちは、知らない》からであると、高橋源一郎は連載『ニッポンの小説』のなかで書く。これはもちろん、トートロジー（同語反復）である。《言葉にすることが不可能な「存在」》について、《語る方法》を知らないのは当然だからだ。つまり、《「存在」について語る方法》を知っていたら、《言葉にすることが不可能な「存在」》ではありえない。彼がトートロジーまで駆使して言いたいことは、「存在」から言葉は押し出されないから、「言葉」は「存在」から離陸せよ、ということだ。そして、願わくば、漱石の《明快な「散文」作品中に、解説しえない、ある独特な質感として》「存在」が残されているように、「言葉」になるために「存在」から離陸しながらも、その「言葉」は「存在」とつながっていなければならない、ということであるかもしれない。

なぜ、「言葉」は「存在」から離陸しながら、「存在」と切断されてはいけないのか。それは、言葉というものはなんでも説明することで済ませてしまおうとする性格や傾向を備えており、言葉はけっして言葉では説明できない世界に直面することによって言葉の断念を学ぶ必要があるからだ。確かに言葉でしか説明できない世界があるように、言葉では説明できない世界がある。つまり、言葉でしか伝えられない世界があるように、言葉では伝えられない世界がある。言葉の本領は言葉でしか表現できない、言葉でしか伝えられない世界のなかにあり、言葉では表現できない、言葉では伝えられない世界の前では、言葉は深く断念しなくてはならない。それ故に、言葉は《言葉にすることが不可能な「存在」》について、語ろうとするべきではないのである。もちろん、言葉が「存在」について語るることなどできないのは明白なのだが。

言葉が「存在」について語ろうとすることは、「存在」にとっての重要な課題を抑圧し、隠蔽していることになる筈だ。「存在」にとっての最重要な課題は言葉によって語られることにあるのではなく、「存在すること」にあるだろうからである。「存在」は言葉によってではなく、「存在すること」によって語られねばならない。では、「存在すること」とはどういうことであるのか。「存在」は場所を持つことにおいて、初めて「存在すること」ができる。そうすると、「存在」はどのようにして場所を持つことができるのか。そもそも場所をもつということは、どのようなことであるのか。おそらく「存在」が場所を持つかどうかは、あるいは「存在」が場所を占めているかどうかは、その場所が単なる空間ではなく、その場所と共に、その場所において展開されているなにか

を、問題を占めているかどうかによって測られるだろう。

必ずしも、その場所でなくてもよいし、他のどこかであってもかまわないというとき、入れ換え可能なその場所は<そこでしかありえないこと>をまだ見出せていない点で、「存在すること」にとっての場所になりえていない。時間が固有の時間を隆起させることがあるように、場所もまた固有の空間を隆起させることがある。固有の時間の中で自己が表現において開花していくように、固有の空間の中では他者との固有な出会いが展開されていくだろう。時間の中では時間を他者と共有できないけれども、空間の中では時間を他者と共有できる。その場所でしか他者と共有できない時間に満たされること、それが「存在すること」の概念に最も近づいているような気がする。つまり、時間の中に隠れている「存在」が場所を見出すとき、「存在すること」が剥き出されていく。

時間の中の「存在」は他者に触れることはできないが、場所の中で「存在すること」は他者に触れることが前提になっている。「存在すること」はしたがって、場所の中で共同の時間を育むことであるかもしれない。いずれにしろ、「存在すること」は場所抜きにはありえず、場所を奪われたとき、人は「存在すること」ができなくなってしまう。もちろん、場所を奪われても人は時間の中で生きることはできる。言葉を持つことができるし、書くこともできる。このことは裏返せば、文章（言葉）を書いている人は場所を奪われた状態にあり、場所を持ちえていないことを前提にして書いていることを意味する。「存在すること」が不可能な状態にあり、できていないからこそ、その欠損状態を埋めるようにして文章（言葉）が激しく喚び込まれているのだ。では、「存在すること」ができていたなら、文章（言葉）が喚び込まれる必要がないかといえかけっしてそうではない。「存在すること」もまた、言葉を存在させようとして文章（言葉）を激しく喚び込もうとするだろう。

松下昇が展開してきたく >~ { } 闘争について考えれば考えるほど、「存在すること」を奪われている私たちにとって、「存在すること」の持続的な追求は国家権力のみならず、いかにさまざまな問題と衝突せざるをえなくなるか、「存在すること」は「虚構としての言語」ではなく、「存在としての言語」をどのように紡ぎだしていくか、といったさまざまな事柄に直面せずにはいられなくなってくる。大学闘争において「存在すること」がまず最初にかつ最大に問われてくるのは、バリケード空間の創出であった。それによってバリケード空間の内と外が仕切られ、外からの高まる風圧に対抗するほどに内では「存在すること」がますます問われてくる。なぜなら、バリケード空間は「存在すること」の意思によって構築され、「存在すること」において成立しているからだ。そこでは「存在すること」は占拠において自らをあらわそうとする。そのとき、空間の占拠と同時になにを占拠しているのかが問われてくる。

「二番目は、創造（想像）的なバリケードです。全国的に目に見えるバリケードが撤去されている段階において、本当のバリケードの意味はこれから、追求され始めるである

うと思います。そのための条件として、目に見えるバリケードの中に何を、いかに形成してきたかということがあります。神戸大学の場合でいうと、大学措置法成立後、もっとも早くバリケードが解除されましたけれども、バリケード形成以前から一貫して自主講座運動を続けていたために、解除されたということがそれ程打撃にならなかったのです。そればかりか、最後までバリケードで徹底的に活動したのは自主講座運動であったし、またその後の授業再開、試験強行にたいしてもっとも戦闘的に反撃したのは、我々の運動でした。」

「私の自主講座運動」において問題提起を行っている松下昇は、物理的なバリケード空間が国家権力と一体となった大学当局によって強制解除されたとしても、「存在すること」が「目に見えるバリケードの中に何を、いかに形成してきたかという」課題を占拠する点にすべてがかかっていると語る。つまり、「存在すること」がバリケード空間の中に閉じ込められずに、問題を占拠さえしていれば「存在すること」が流動的にバリケード性をどこにでも構築できると示唆する。「我々が活動する空間がそのままバリケードになってしまう。例えば、この教室を授業で使うとしますと、ここを占拠して、自分達の問題提起をおこなう。別にロッカーとか、机で封鎖しなくても、我々の存在がそのままバリケードに転化していく。しかも、移動可能なわけですから、いたるところに出没して、ゲリラ的にバリケードを運動させていくわけです。これは不可視の領域へまで拡大していくべきだと思います。」

「存在すること」がバリケード空間内で追求している問題をかかえ込むようになると、「存在する」ところはどこでもバリケード性を帯びてしまう。「存在すること」は法で許容されている存在様式を逸脱することによって、つねに不法占拠状態とみなされてしまうだろう。いうまでもなくバリケード空間を構築すること自体が違法であり、したがって、バリケード空間内に「存在すること」が不法占拠状態としてあらわれるなら、その不法占拠は単なる法侵犯の次元を突破して、法を抛りどころとする存在形態と真っ向から衝突することにも耐えうるなにかの占拠にまで深められなければならない。「目に見えるバリケードの中に何を、いかに形成してきたかということ」はそういうことだろうし、「存在すること」がどうしても違法性を帯びてしまうが故に、「存在すること」は遮断されている人間の存在形態への根底的な問いかけを占拠しつづける必要があるだろう。「存在すること」においてバリケード性を可視的な領域で持続させていくためにも、「不可視の領域へまで拡大していくべきだ」という提起は、「不可視の領域」に「存在すること」の度合いで、可視的な領域における運動の水準が決定されるという響きを帯びているだろう。「存在すること」のバリケード性が「不可視の領域」を見据えていることの重要な証として、「言葉」の問題が次のように浮上している。

「一番目は、2月2日に私が出した「情況への発言」に示されていますけれども、大学闘争における表現の階級性粉碎を主要な根拠にしています。例えば、権力を持っている

者の表現と持たない者との表現とは、文字として、あるいは声として同じであっても、それが現実を持つ意味については全く違ってくる。そして闘争の契機自体よりも、闘争過程において各人が表現にたいして持っている責任を追求する形で、闘争が持続しているわけです。具体的には、この問題について全ての人が私に対してこたえるまで、大学の秩序に役立つ労働を放棄するという形で授業や試験やその他一切の旧秩序維持の労働を拒否しているわけですが、同時に、単純な拒否でなく、自分の出来る範囲で攻撃的に粉砕してゆこうと考えました。」

ここでは、「存在すること」の言葉として語られているのが認められる。「権力を持っている者の表現」はその表現（言葉）の中に権力意思が込められていることによって、権力を持たない者の表現（言葉）と根本的に区別されている。権力の表現は「命令する」言葉であり、権力を持たない表現は「命令される」言葉しか持たない。ここで重要なことは、法が言葉によって語られるように、権力もまた言葉によってあらわされていることだ。要するに、言葉がなければ法は法であることはできないし、権力は権力であることができない。松下昇は我々が言葉の支配関係にあることを浮き彫りにしてみせたのだ。彼はここではもちろん、あからさまに語っているわけではないが、作家や評論家、学者などの言葉を駆使する知識人は、言葉の支配関係、あるいは言葉（表現）の階級性という、言葉の現実性について自分の言葉がどのように考え、どのようなスタンスを取っているのか、を問うていた筈である。

《〈神戸大学教養部〉の全ての構成員諸君！ 2月1日の団交は評議会が〈寮問題〉に関する解決能力を持っていないことを暴露した。

しかし、これだけをスト続行か中止かの基準にしてはならない。まして〈時間〉が切迫しているからといって、〈しけん〉のための秩序に復帰してはならない。

〈スト〉に入る契機自体よりも、一ヶ月以上にわたるスト持続によって、一切の大学構成員と機構の真の姿がみえはじめ、同時に、自己と、その存在基盤を変革する可能性がうまれていることの方が、はるかに重大なのだ。

〈神戸大学教養部〉の全ての構成員諸君！ このストを媒介にして何をどのように変革するのか、そして、持続、拡大する方法は何か、について一人一人表現せよ。

少なくとも、この実現の第一歩が、大衆的に確認されるまで、〈私〉は旧大学秩序の維持に役立つ一切の労働（授業、しけん等）を放棄する。

この問題提起に何らかの共有性を発見する諸君は、自己にとって最も必然的な方向を創り出して闘争に参加せよ。》

これは、松下昇の1969年2月2日付けの「情況への発言」の全文であるが、彼の言葉はいま自分の目の前で起こっている現実に向かって、一体、なにを発言できるのか、という問いのうえに立って、《少なくとも、この実現の第一歩が、大衆的に確認されるまで、〈私〉は旧大学秩序の維持に役立つ一切の労働（授業、しけん等）を放棄する》

場所の中に、「存在すること」を宣言していたのだ。いうまでもなく《放棄する》ということは、《〈私〉は旧大学秩序の維持に役立つ一切の労働（授業、しけん等）には戻らないということであり、《このストを媒介にして何をどのように変革するのか、そして、持続、拡大する方法は何か、について》表現する方向にすでに一歩足を踏みだしているということであった。この神戸大学教養部掲示板に貼り出された言葉（文章）が、《一ヶ月以上にわたるスト持続》の現実の中に書き込まれていたことが重要であった。

権力を持っているのは大学の評議会であり、その評議会に対して権力を持たない学生たちは、ストバリケードの構築というかたちで対抗しようとした。〈スト〉は現行の大学秩序を停止させる行動であったが、学生自身にとっても学生として大学秩序を支えている自らの存在形態を停止させる行為にほかならなかった。従来のストは要求貫徹の手段であり、要求が受け入れられても受け入れられなくても、ストはやがて解除されてスト参加者は職場の旧秩序に復帰していくのが、慣行として予定されていた。松下昇の「情況への発言」はそんなストのありかたをも根底から引っくり返すものであった。ストは〈寮問題〉を契機として行われたとしても、〈寮問題〉のかたちであらわになっている現行の大学秩序そのものに向かわなくてはならないし、同時にその大学秩序を学生や教師として支えている自らの存在形態に対するストでもあることを提起していたからだ。

〈スト〉は本来的に要求獲得の戦術の次元を超えて、〈スト〉の中で育まれる新たな主体を孕んでいなければならなかった。〈スト〉を経験する以前と経験した以後とでは、参加者が一変してしまっているような〈スト〉でなければ、ストは要求によって獲得される以上のものはなにも獲得しえなかった。要するに、新たな主体も関係もなにも生みだされないようなストであった。ストの概念を永続的な〈スト〉にむかって転倒させることがそこで表明されていたが、では、〈スト〉は大学に対する要求の次元を超えて、どのような具体的な次元に向かわなくてはならなかったか。しかし、《このストを媒介にして何をどのように変革するのか、そして、持続、拡大する方法は何か、について一人一人表現せよ》という方向性のみが提起されているだけであった。具体性はなにもなかったというより、その方向性において具体性を創出せよ、という提起でもあったと解せられる。

《このストを媒介にして何をどのように変革するのか》という問いそのものが、具体性を帯びた課題として迫り上ってくる必要があったし、《持続、拡大する方法は何か》という問いは、それ自体具体的でなければどこにも着地しえないものであった。獲得すべき具体的な要求というものは、「いまある」もののなかで決着を図られるべきものではなく、「いまある」なかで深く欠損してみえなくなっている「いまない」もののなかに突き入らなくてはならなかった。〈スト〉の概念が根底から引っくり返されていたように、ここでも「いまある具体性」ではなく、「いまない具体性」をどのように獲得していくか、その力量をどのようにして備えていくか、という問いとして〈具体性〉の概念を根底から引っくり返していたのである。〈スト〉を持続するなかで多くの根本的な問いを運動

させていくためには、当然ながら<スト>以前には「戻らない」という決意と覚悟が不可欠の前提になっていなければならなかった。

松下昇の「情況への発言」は<スト>や<具体性>の概念を根底から引っくり返しただけでなく、それ以上にはるかに大きくて根源的であったことは、やはり<言葉>の概念を根底から引っくり返してみせたことである。別の言いかたをすれば、<言葉>はどのようにして発されていけば、現実の力をもつようになるかを鮮やかに提出してみせたのだ。<言葉>が指し示してみせた問題を、そして<言葉>がかかえ込んでいる問題を発語主体が支えつづけるかぎり、<言葉>は「存在すること」ができるということであった。したがって、ここに出てくる<表現>という概念は単なる言語表現の枠組みを超えて、人類発生以来見失われてきている「存在すること」を奪い返していく<言葉>を表現していくという意味を含んでいた。言葉でなにかを表現していくということだけでなく、表現主体をも同時に表現していこうとすることによって、表現されていく<言葉>のなかに表現主体が「存在すること」を目指していたのである。

この「情況への発言」のなかでもし、《この実現の第一歩が、大衆的に確認されるまで、<私>は旧大学秩序の維持に役立つ一切の労働（授業、しけん等）を放棄する》という一行が書き込まれていなかったとすれば、そのときこの貼り紙は「情況への発言」として成立するだろうか。吉本隆明が行っていたような「情況への発言」の水準では成立するけれども、情况的には成立しないだろう。発言主体はこの発言のどこにもみえないだけでなく、なによりも「存在」していなかったからだ。発言主体がその中のどこにも「存在」しない「情況への発言」は成立する余地がなかった。「情況への発言」は<発言への情況>を抜きにしては成立しないのだ。この「情況への発言」を発言主体としての<私>がたとえ<一人>でも支えるということではなければ、一体誰が支えるというのだろうか。「情況への発言」の発言主体である<私>は、<私>の中の<一人>として「情況への発言」と共に同時に出現していることを表明していたのである。

「情況への発言」は発言の情況の中に「存在すること」を表明していたが、このことはまた、《このストを媒介にして何をどのように変革するのか、そして、持続、拡大する方法は何か、について一人一人表現》することがバリケード空間の中でほとんど考えられていなかっただけでなく、表現するべき<言葉>も生みだされていないことを浮かび上がらせていた。スト参加者のなかには詩や小説を書いたり、評論的な文章を得意とする学生たちも少なからずいたにちがいない。だが、彼らの駆使する言葉は闘争過程を描写したり、見通すことのできない闘争のなかで募ってくる不安な気持の揺らぎを詩や散文のかたちでまとめたり、あるいは神戸大学の闘争を全国的な大学闘争のなかに位置づけることに懸命であったりしても、闘争の情況の中で生まれ、生きていく<言葉>に向かっていくことはなかった。彼らの言葉は闘争の情況とはまだ出会っていなかったのである。「我々が創り出しうる最も深い情況に我々自身が存在すること、そのことによって引き

寄せられて来る一切のテーマが自主講座運動のテーマであるし、その時やって来る全ての人間が自主講座運動の参加者になるわけです」と、問題提起「私の自主講座運動」のなかで松下昇が語る時、「我々が創り出しうる最も深い状況に我々自身が存在する」中で、どのような〈言葉〉が生みだされ、その〈言葉〉の中にも「存在すること」が問われていたのだ。ここで問題となってくるのは、「我々が創り出しうる最も深い状況」に〈言葉〉がどのように関与しているかということである。いうまでもなくその「状況」とは先の松下昇の「状況への発言」が「創り出しうる最も深い状況」であって、その発言の状況に「存在すること」が問われていると考えるなら、〈言葉〉の中に「存在すること」と、「存在すること」から生みだされてくる〈言葉〉、というような〈言葉〉の運動論がみえてくる。「私の自主講座運動」では、〈言葉〉そのことについてもっと直接的に語られている箇所がある。

「全共闘運動という概念は、自分にとって必然的な課題と、状況にとって必然的な課題とを対等の条件で共闘させるということではないでしょうか。従って、何かを粉砕するとか、打倒するとかはそれだけでは、スローガンになり得ないのです。必ず、それと対等な自分のスローガン、自分だけの言葉によるスローガン、それがうまく表現できるかどうかは別として、そういう自分のスローガンを対等に結合させえない限り、決して或るスローガンを担いきることは出来ないし、まして命をかけることは出来ないだろうと思います。」

自分にとって必然的な〈言葉〉と、状況にとって必然的な〈言葉〉とを「対等の条件で共闘させるという」ように読み替えてみる。すると、スト参加学生たちがバリケードの中で書いている詩や小説、評論の言葉は自分にとって必然的な言葉かもしれないが、状況にとって必然的な〈言葉〉とはいえない。従って、「対等の条件で共闘させる」ことはできない。ではどうすれば、詩や散文の自分の言葉と状況の〈言葉〉とを「共闘させる」ことができるのか。おそらく彼らが紡いでいる詩や散文は自分の欲している言葉かもしれないとしても、自分にとって必然的な〈言葉〉であっただろう。いうまでもなく詩や散文は「虚構としての言語」に属している。「虚構としての言語」の中では当然、書き手である「私」も「虚構としての私」である。我々が「虚構としての言語」の中に「虚構としての私」を存在させたいのは、虚構ではない現実の中で我々が「存在すること」を妨げられているからだ。現実の中ではどうしても「存在すること」ができていないという満たされない思いが、我々を「虚構としての言語」の中に存在する「虚構としての私」の創出へと向かわせずにはおれなくするのである。

「虚構としての私」が現実の中の「私」と交点を持つことができないように、「虚構としての言語」も現実の中で「私」が語る言葉と交点を持つことができない。「虚構としての言語」は現実に向背を向くようにして紡ぎだされている以上、状況にとって必然的な〈言葉〉と「対等の条件で共闘させる」ような自分にとって必然的な〈言葉〉になって

いくことはできない。「虚構としての言語」と自分にとって必然的な言葉とは次元が異なるし、領域も異なる。では、自分にとって必然的な言葉とはどのような言葉であるのか。松下昇の「状況への発言」を目の前に置いて、この問題について語ってみる。「状況への発言」は、松下昇にとって必然的な〈言葉〉と状況にとって必然的な〈言葉〉とが「対等の条件で共闘」している見事な実例であって、そこから彼にとって必然的な〈言葉〉と状況にとって必然的な〈言葉〉とを切り離すことは困難だが、傾向として取り出すことは可能である。

《しかし、これだけをスト続行か中止の基準にしてはならない。まして〈時間〉が切迫しているからといって、〈しけん〉のための秩序に復帰してはならない。》《〈神戸大学教養部〉の全ての構成員諸君！ このストを媒介にして何をどのように変革するのか、そして、持続、拡大する方法は何か、について一人一人表現せよ。》《少なくとも、この表現の第一歩が、大衆的に確認されるまで、〈私〉は旧大学秩序の維持に役立つ一切の労働（授業、しけん等）を放棄する。》《この問題提起に何らかの共有性を発見する諸君は、自己にとって最も必然的な方向を創り出して闘争に参加せよ。》

以上の個所は、紛れもなく松下昇にとって必然的な〈言葉〉でありながらも、状況にとって必然的な〈言葉〉の要素が濃厚に感じられる。いいかえると、状況の中の松下昇の〈言葉〉として受けとめられる。「状況への発言」であるよりも、「状況からの発言」と名付けたほうがいいくらいだ。したがって、松下昇の〈言葉〉と状況の〈言葉〉とが「対等の条件で共闘」しているどころではなく、松下昇に仮装した状況が発言しているとどうしても聞き取れてしまう。とりわけ最後の一行は、《自己にとって最も必然的な方向を創り出して闘争に参加せよ》と、ほとんど状況からの呼びかけになっている。注意すべきは、闘争にむかって《自己にとって最も必然的な方向を創り出》すことを問いかけている点である。闘争への参加の文脈のなかでの《自己にとって最も必然的な方向》なのであり、それは自分が創り出す以外にないから、創り出すこと自体がすでに闘争への参加になってしまっているのだ。

「状況への発言」の中の、《〈神戸大学教養部〉の全ての構成員諸君！ 2月1日の団交は評議会が〈寮問題〉に関する解決能力をもっていないことを暴露した。》《〈スト〉に入る契機自体よりも、一ヶ月以上にわたるスト持続によって、一切の大学構成員と機構の真の姿がみえはじめ、同時に、自己と、その存在基盤を変革する可能性がうまれていることの方が、はるかに重大なのだ》という他の個所はしたがって、松下昇がそう捉えたことによって、《自己にとって最も必然的な方向を創り出して》いることを明示し、すでに闘争に参加していることを物語っていた。確かに状況がそのように分析したり捉えているわけでもなく、そう分析し捉えているのは松下昇にほかならなかった。もちろん、そう捉えることができたのは、彼がそう捉えることができるような歩みを状況に即して進めてきたからである。つまり、60年安保以降の自分の全行程が「状況への発言」

たりうるようにして、表現し存在してきたということだ。

「私の自主講座運動」では、自分にとって必然的な〈言葉〉について次のように語っている。

「私にとっては、それは、ご承知の方もあるかと思いますがけれども、いくつかの作品、たとえば、〈包圍〉とか、〈六甲〉とか、そういった作品を本当に時＝空間の中に生かしていく、そういう作業が別の面で大学闘争に参加しているといえるに過ぎないのであって、決して私は、大学闘争が正しいからやっているのでもなければ、学生諸君が正しいから支持するのでもないのです。そのような方向性を持続化することが、ある意味では大学闘争にもなり、それをこえていくという関係だろうと思います。」

さて、自分にとって必然的な〈言葉〉は、「自分だけの言葉によるスローガン」と言い換えられて、状況にとってのスローガンと「そういう自分のスローガンを対等に結合させえない限り、決して或るスローガンを担いきることは出来ないし、まして命をかけることは出来ないだろう」と強調されている。「自分だけの言葉」を生きることが自分の中に閉じ込められずに、状況の中に生きようになること、別言すると、「自分だけの言葉」を生きることにおいて状況の言葉として生きられるようになるということだが、「自分だけの言葉」とは交換不可能性をあらわしている。状況のスローガンとはその反対に、交換可能性をあらわしている。そうすると、交換不可能であることにおいて交換可能性な領域に突き出されていかななくてはならないという大変な困難な課題がここで提示されていることになる。「自分だけの言葉によるスローガン」を持たなければ、自分の「命をかけることは出来ない」が、「命をかける」場所は状況の中にしか存在しない。

自分にとって必然的な〈言葉〉がつくりだされなければならないように、「自分だけの言葉によるスローガン」もまた、つくりだされなければならない。つくりだされることにおいて自分にとっての闘争が開始されているとして、その自分にとっての闘争が状況にとっての闘争として展開されるようになるとき、「自分だけの言葉によるスローガン」は「命をかけて」状況の中で生きられるものとして、展開されねばならないのだ。このことは、「闘争過程において自分がどのような言葉をつくり出したか、どのような言葉にひかれて、それをになってきたか」という問題です。常に人の言葉で戦い、人の言葉で死ぬということは、本当に戦うこと、死ぬことになり得ないと思います」という言いかたで、闘争は「自分がどのような言葉をつくり出したか、どのような言葉にひかれて、それをになってきたか」によって測られていくことが、示唆されている。

闘争の質、あるいは闘争の水準といったことについて考えるとき、その闘争の質なり水準はどのようにして明らかにされるか。それは、闘争がどのような〈言葉〉を生みだしているかによって明らかになってくる、と松下昇が言っているように聞こえる。闘争はその時々々の局面において生みだされる〈言葉〉によって持続されていく、とも受けとめられるが、闘争が闘争それ自体の〈言葉〉を必要としている度合いで、闘争は〈言葉〉

を生み出すたたかいを繰り返していることにおいても闘争であらねばならない、ということである。もちろん、〈言葉〉を生み出すのは闘争の参加者であって、闘争そのものではない。闘争参加者が闘争の〈言葉〉によるスローガンを生み出すためには、「闘争過程において自分がどのような言葉をつくり出したか」が問われてくるということだ。闘争の〈言葉〉は闘争過程においてつくりだされる自分だけの〈言葉〉と連動しているからである。

「自分をそのように表現させる世界の根拠を、自分が叫び声をたてざるを得ない根拠というものを徹底的に追求することであって、それは政治という領域をはるかに超えた行為だと思うのです」と続けて語られていることにつなげると、なんのために闘争するのか、闘争しなければならないのか、がくっきりとみえてくる。自分にとっての〈言葉〉に出会うためである。それ以外ではない。自分にとっての〈言葉〉というものは、詩や散文の言葉を追求するなかからは生みだされないものなのか。生みだされない。なぜなら、詩や散文の言葉をいくら積み上げても、自分を変革しないからだ。自分にとっての〈言葉〉は、自分が変革される度合いでしか出会うことができない。いまの自分が紡ぐ詩や散文の言葉が、いまの自分を変革することができるなら、そこから自分にとっての〈言葉〉は訪れてくるが、詩や散文の言葉がいまの自分が立っている大地を引き裂く〈地震〉を惹き起こすことはありえない。

機構だけの変革ではなく、「同時に、我々自身の表現の根拠、我々自身が表現するときの根拠をも含めて変革しないかぎり、何一つ始まらないだろうし、それは古い形の階級闘争に還元されてしまう」という松下昇の指摘は、機構と機構を支えている我々自身を同時に変革することによって、変革されつつある我々自身の表現として自分にとっての〈言葉〉が訪れてくるだろうし、自分にとっての〈言葉〉をつくり出さなければならないということだ。なぜ、いまのままの自分では「命をかけること」のできる、自分にとっての必然的な〈言葉〉に出会うことができないのか。いまのままの自分にできることは詩や散文の言葉を紡いで積み上げることだけであり、そこでは「命をかける」という発想自体が縁遠い。つまり、詩や散文にとって「命をかける」言葉などは全く不要なのだ。「命をかける」という発想は「存在すること」を離れては成り立たない。

詩や散文の言葉は、自分が「存在すること」とは無関係に紡がれていく。というより、「存在すること」ができていないところで、それらの言葉は飽くことなく紡がれていく。そこからは闘争の発想は限りなく遠く、「闘争過程において自分がどのような言葉をつくり出すか」という問いとは全く無縁である。これは〈言葉〉の次元の問題として捉えられるのだろうか。闘争過程において自分がつくり出す言葉によって、詩や散文を書くことができるか、と問うてみる。書くことができる筈である。いや、書かなくてはならない。もし書くことができるなら、そのような詩や散文は従来のそれらと全く異なるだろうが、明らかなのはそれらの詩や散文は従来のそれらと違って、「存在すること」が

できる筈だ。まだ、我々はそんな詩や散文に出会っていないが、我々の「存在すること」が闘争過程において変革されるなかからしか、それらの言葉は出現してこないだろう。

言葉が「存在すること」の問題について松下昇は「表現の階級性という問題」として、次のように具体的に説明している。「一つの文章、一つの言葉があるとして、それがどこで表現されたかによって、全く意味を変えてしまいます。たとえば、教授会の中でAという発言がなされ、学生諸君の集会でAという発言がなされるとします。言葉としてはまったく同じであるにもかかわらず、それが現実過程において持つ意味は決定的にちがいます。それは階級闘争の問題であると同時に、言葉の本質にかかわる問題でもあるわけです。このことは沈黙についても言えます。教授会の中で決して発言しない、あるいは団交で追求されても決して発言しない、責任追求されても決して発言しない、そのような沈黙が問題である場合、意味はゼロかというとはやはりそうではないわけです。沈黙もそれなりの階級性をおびてしまうのです。これは階級性という言葉ではおおいつくせない、むしろ原罪性というべき問題だろうと思うのですが、そういう問題が本質的に展開されたのは大学闘争においてだろうと思うし、この点をはっきりさせておかないと、我々の語る言葉は全て死んでしまうと思います。」

言葉の本質的な問題をもっとはっきりと浮かび上がらせるために、「教授会の中で決して発言しない、あるいは団交で追求されても決して発言しない、責任追求されても決して発言しない」にもかかわらず、別の場所や家の中ではよく語ったり、あるいは学術論文の作成では言葉は順調に繰りだされたり、詩や散文の言葉が意欲的に押しだされてくるといったことについて考えてみる。一体、他では淀むことのない言葉は、教授会や団交で「決して発言しない」言葉についてどう考えているのだろうか。おそらくにも考えていない。「団交で追求されても決して発言しない」言葉と、詩や散文として押しだされていく言葉とは、彼の中では区別されており、なんの齟齬をきたすこともなく同居しているのだ。現実の中で存在する自分の言葉と、現実ではない紙面に埋められていく自分の言葉とは、同じ自分の言葉とはみなされていない。同じ自分の言葉であるにもかかわらず、現実に影響を持つ自分の言葉と、現実的な影響とは切断されている（ように見える）自分の言葉とは隔絶しているのだ。つまり、現実の中の自分が白紙に向かっていく自分になんの影響をも与えず、詩や散文を書いている自分の言葉は現実の中に存在する自分の言葉になんの影響も与えない。そのような棲み分けが可能となっていることによって、詩や散文の言葉は現実の中の自分の言葉から遠ざけられて、保護されている。「どこで表現されたかによって」、言葉の意味が全く変わってしまうという問題と同時に、詩や散文の言葉が自分の現実に存在する場所に対して沈黙の意味を帯びてしまうという問題がここで明らかにされているのである。

「存在するということは、荒れ狂うということにほかならない」（バタイユ「人間と動物の友愛」）

2006年8月6日記